人虎の春
成人向

その国では「人虎」と呼ばれる半人半獣と人間が共に暮らしていた

大戦の時代には人と人虎が対となり他国の侵略に対抗する絶大な戦力を発揮した

しかし そんな時代も はるか昔のこと

大戦により数が激減した人虎は神獣として崇められ

今では一部地域の領主が代々従えさせるのみとなっていた…

ドドドッ

ドドドッ

ガルルッ

しぶとい狼どもめ…!

そっちへ行ったぞ!

マオ!!

!!
ザッ
ガバッ
キャイン
ザザッ
キャイン
ようやく諦めたか…
スクッ
ブルル

さすがだな
それでこそ
次期領主 瀏亮の
人虎だ
マオ
人虎の春

メェ～～
メェーー～！
ありがとうございます 劉亮さま
家畜はこの国の財産だからな
また狼が出たらいつでも言ってくれ
それにしても
こうして人虎を従え 馬で駆けるお姿を見ると
大戦時代の将のようですな
ブルルッ
フハハッ
それは光栄だな

なあ
マオ…

ぺろん♡

!!?

ぶわっ…

む…ぷは!

あ…

あわわ…

こら!
やめないか!

マオ!

ははは…
瀏亮様とマオ様は
本当に仲睦まじい
ですな

ゴロゴロ
ゴロゴロ

そ…そのような
間柄では…

ぎゅ

マオ!!

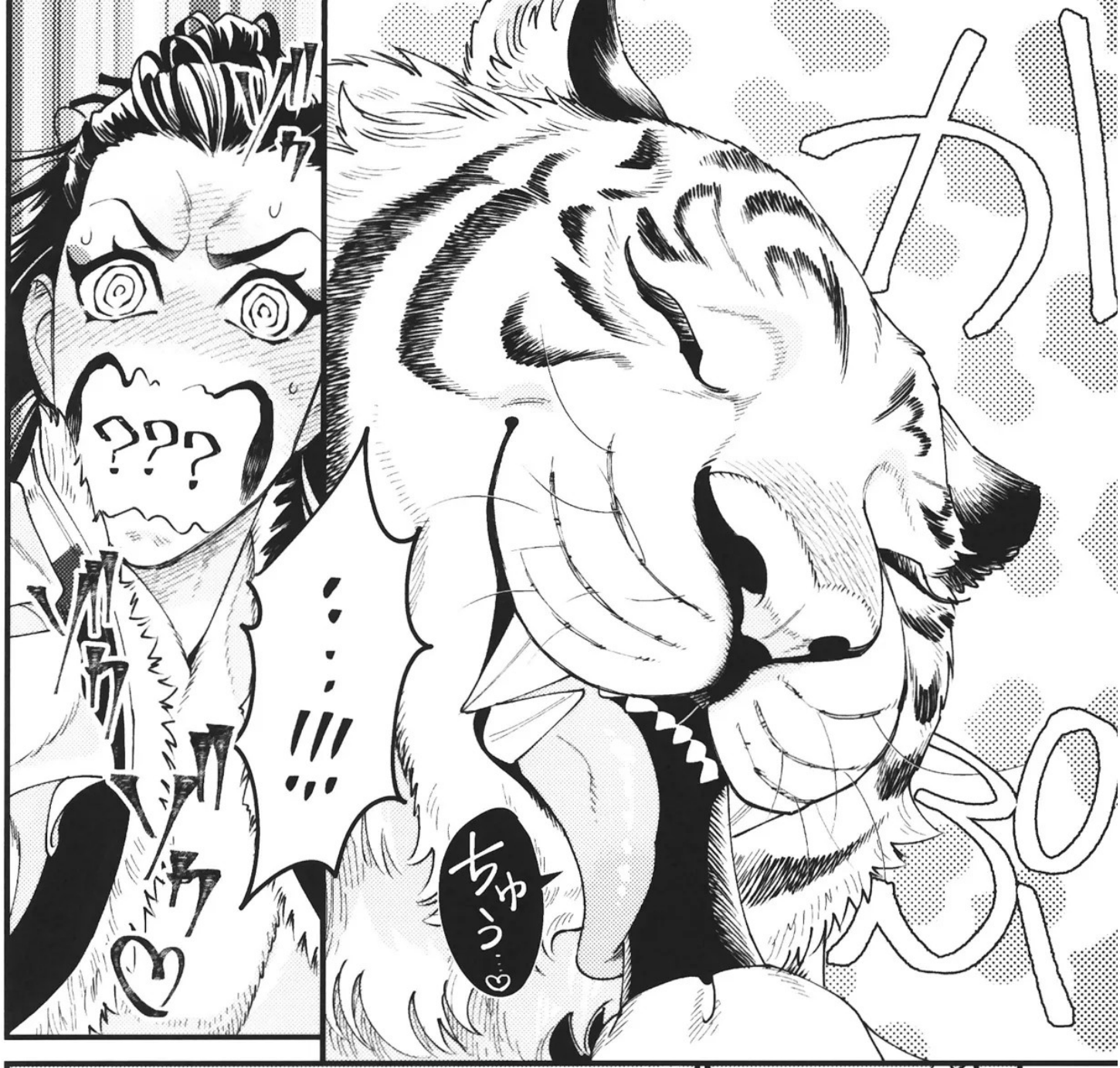
ぎゅ

しっかりしろ!
お前一体…

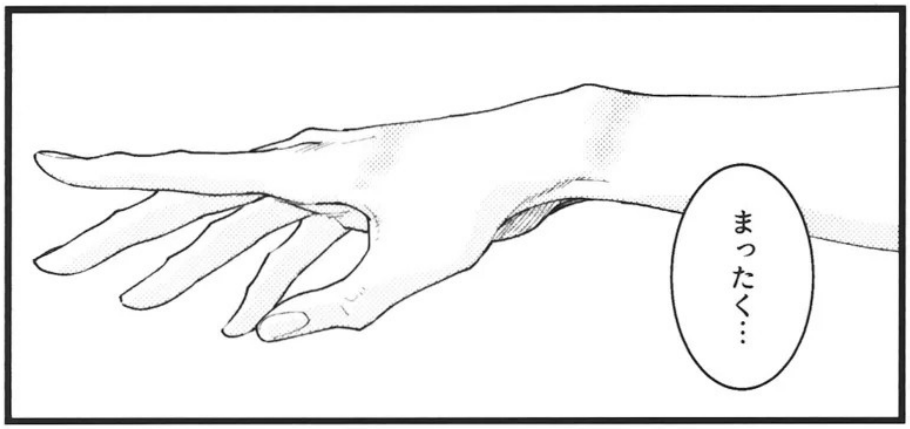
どうしたと
言うのだ!?

ハァ…

うっとり…


ちゅう…♡
…!!!
???
ガクガク

メエエ〜
いい加減に…
しないかあああああ!!


まったく…

どうして
あのような事を
したのだ？

ぬり

ぬり

…すまない

領民たちの
目もあるのだぞ！

プリ

プリ

シャキッと
せぬか！

カワイイ

むええ～

そればかり
ではないぞ

近頃は夜中に
徘徊したり
意味もなく
大きな声を
あげている
そうではないか

まったく…
神獣人虎が
そのような
事では…

クド クド

りゅ…
りゅうりょお～

どうしたのだ

父上

瀏亮の父　亮寛

見合いをしてみよう！

ちょうど隣領の元に雌の人虎が新たに来たと聞いてな

Love & Piece!

子猫が産まれれば平和的に人虎も増え隣領と友好的な関係も築ける

まさに一石二鳥ではないか！

ちょ…ちょっと待ってください

瀏亮よそろそろ次期領主としての自覚を持て

お前がマオの事を気に入っているのもよくわかる

だが儂は今私情の話をしておるのではない

「政」の話をしておるのだ

良いな瀏亮マオ

……

わかりました

!!

良寛様の命ならば

そのように…

よしっ決まりだな！

早速遣いを出す準備をしよう！

瀏亮
瀏亮
怒っているのか？
……
怒ってなどおらぬ
あっちへいけ
瀏亮…
現領主である亮寛様の命を断る理由は俺にはない
わかっているだろう

……

わかっておる…

瀏亮…

ならばどうして

そのような顔をする

どうしてだと？

それはこちらの台詞だ

3年前…
まだ未熟者だった俺に
お前は頭を垂れてくれた

そのおかげで
父を含め
臣下や民たちが
皆　俺を
認めてくれた

どんなに誇らしく
嬉しかったことか…

それから
俺とマオは
いつも一緒だった

冬は共に本を読み
俺はお前に言葉を
教えた

春は共に
野を駆け獣を追い

夏は共に木陰で涼み

秋は共に
祭りに繰り出した

次期領主という
重圧に幾度
苦しめられようと
その度にマオが
救い上げて
くれたのだ
そんなお前を
どこの誰とも
わからぬ女に

どうして易々と渡せようか…!!
瀏亮…!
わかっておるのだ…!
それなのにいつまでも幼子のように…
ぎゅう…

……
マオ…？
瀏亮
もういい…
もう…
充分だ

わかって
いたんだ

自分の体に
起きていることも…
なぜそうなって
しまったのかも…

瀏亮は
俺の大切な
主人だ

この指を
どれだけ
甘く感じても
俺はただの
従者にすぎない

「神獣人虎も
理性を失えば
ただの獣だ」と

何度も何度も
自分に
言い聞かせてきた

……

それなのに…
瀏亮から
そんな事を言われたら…

俺は…！

じゃあ…
やたらと体を
舐めたり甘噛み
していたのも…

ああ…

見合いの話を
承諾したのも
わざと…

ああ
そうだ…

俺は瀏亮が
好きだ

捧げるなら
瀏亮がいい

莫迦者が…
スル…
っ…
ハァ…

ああ…

この舌だ…

ンッ…

マオの舌に触れられる度おかしな気分になっていた…

ハァ

ハァ

ハァ…

フゥ

フゥ

ズルッ…

あっ…！

ズズッ

ちゅぷ!!
ちゅぷ
あっ
やっ
そのような
ところ…
ハァ
ハァ
ぬるん
マオ…!
ああっ…!
ビクッ
ビクッ
ぴゅるるる
ぬるるっ

…マオ？
どうした？
いや…その…
爪が…
にゅっ
あー
すまない
次からは整えておく…
次…
アタ
アタ
あ！いやその…そういう意味では…
クスッ
ちゅっ

よい

カリッ

今度俺が整えてやろう

！

ゾクゾクッ！

トロリ…

それに…

手のかかる猫ほど可愛いというものだ

トロ…

ン…

!!

りゅ…瀏亮！

ンンッ

ぬちゅ…

ハァ
ハァ
ンッ
あっ
マオ…♡
ハァ…
…まお♡
ハッ

あ♡
あっ♡
ンァ…♡
ちゅる…
は…
ぬる
ぬる
ンあっ…♡

瀏亮…！

ハァ

くちゅ…

マオ…♡

ハァ

ずる…

ぐいっ

あっ

瀏亮ごめん…

ピト

もう我慢できない…！

あっ

マオ…！

まって

やっ…

ぎっ…
あっ
あっ…
ぐんっ
ビクッ
ビクッ
あうっ!!
ぎちっ…
あ…ぁ…
マオ…♡
ハーッ♡
ハーッ♡
瀏亮…

ハッ…
ちゅ…
ぬちゃ
ぬちゃ
あ
あぁ
ッッ…
ゾクゾクゾク
ギリ
ギリ
ぬちゃ
ぬちゃ
ぬちゃ
ぬちゃ
ぬちゃ
ゾウ
ン…
ン
トキュン♡
ギチ
ギチ
はぅっ…
ヒュッ…

あっ…く
ぶるっ
んあっ…♡
ビクッ
ビクッ
ビクッ
クリ
ビュウ
ウウウ
ぁぁぁぁぁ♡
ぎゅっ♡
ぎゅっ♡

ハア
ハア
我爱你
ちゅ…
我可愛的猫…
3日後
ああ…政に私情を持ち込むのは良い領主とはいえぬ
父の意向は最もだ
カシ
カシ
本当にいいのか?
それに何より
俺はお前の心に触れられたことが嬉しい
瀏亮…

だからと言って向こうの人虎が可愛いからと

俺を忘れるでないぞ～

その時はありったけの騎馬兵を連れて乗り込んでやる！

そ…それはない！絶対に!!

ふふっ

冗談だ

俺の心は向こうに行っても変わらない

死ぬまでずっと瀏亮のものだ…

わかっておる…

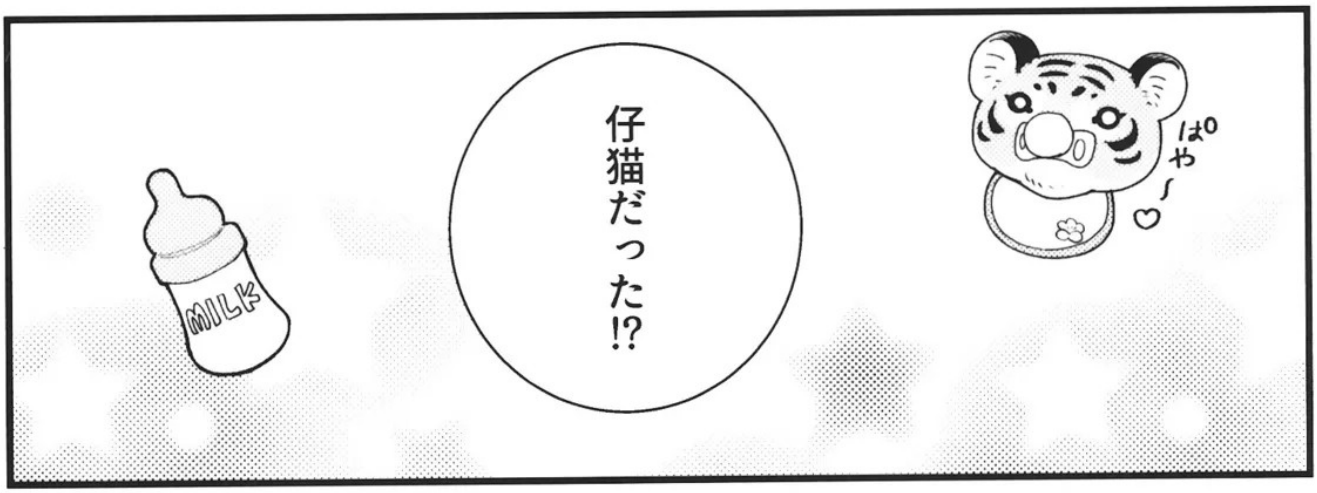
ああ何という事だ！

聞いてくれ2人とも!!

……

？どうしたのだ？

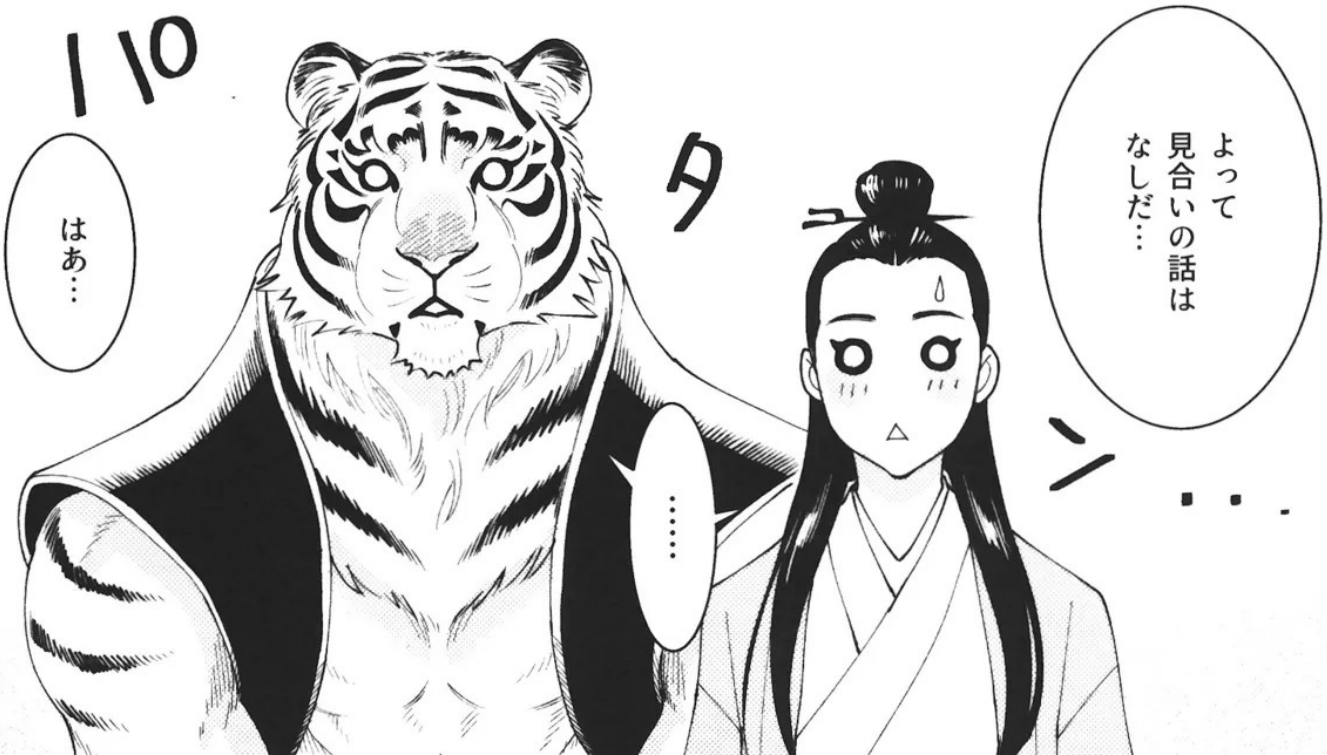
この物体はマオか？


ぱや〜♡
仔猫だった!?
MILK

ああ…仔猫も仔猫発情期どころか
愛い〜♡
ぱや
ぱや〜
乳離れをしておるのかも怪しい幼子だったのだ!

近頃はマオの発情期も引っ込んでおるようだし…
ハァ…

肝心の雌が仔猫では話にならん
亮賀様
お気をたしかに


よって見合いの話はなしだ…
はあ…
……
ヒュ
タ
ン…
110

その国では
『人虎』と呼ばれる
半人半獣と人間が
共に暮らしていた
人虎は人間に
傅き
人間は人虎を
慈しみ
生涯共に あったという

人虎の春

キャラ設定
とかいろいろ！

ケモノ＝ファンタジーが描ける！やったー！と思って中華ファンタジーになりました。
コスチュームのデザインや構造が分からず、中国のフォロワーさんに色々と教えてもらいながら「飛魚服」と言う衣装に落ち着き、少しアレンジを加えました。
馬に乗った時や布のなびき方の参考に、2本くらい飛魚服の時代設定の中国映画を見たりもしました。アクションの演出としての布の使い方がアジア映画ってすげ～と思いました(作文)「ドラゴンゲート」って言う映画なんですが悪役のお兄さんがとても美しかったです。

南国の台湾に雪降ってたら面白いだろうなあと思って台湾の写真を参考にしながら背景を描いていました。(ほぼ雪で真っ白になりましたが)ベッドの装飾や家具や提灯などの中華っぽいモチーフを描いていくのも楽しかったです。ちなみにめちゃくちゃ分かりにくいですが、担当さんの提案で最後のページの草原を走ってるシーンは何年後かに領主になった劉亮とマオの姿です。

デ●ズニー・ピ●サー・ド●ームワー●ス系の作画がとても好きなので獣人描く時はよく参考にします。(描けてるかどうかは別)

獣人BL描くにあたって虎のちんちんを画像検索したんですがうっかりグロ注意受けちゃんのお尻ズタボロやんけって思ったので首から下(特に下半身は)人間と同じだと思ってください…。タマタマはフカフカです。

次のページからは本編の前身となったボツプロットです。(死ネタだよ)

虎狩り

土地を統べる領主の息子「瀏亮」は今年18歳になる。
成人を前にした冬、次期領主として見合う男になれるかどうか、通過儀礼として年老いた父は息子に虎狩りを命じる。

10名ほどの部下達を引き連れ、雪深い山の中、馬に乗って訪れた瀏亮だが
本当は次期領主になることも、虎狩りをすることも嫌だと思っていた。

白い大虎が現れると言われる山奥まで馬を進めたところで、一行は狼の群れに襲われ、正気を失った馬が瀏亮を乗せたまま山道から滑落してしまう。

柔らかい雪の上で瀏亮が目を覚ますと
目の前に大きな白虎が瀏亮を見下ろしていた。
息は荒く、瞳をぎらつかせてこちらを見ている。
恐怖におののき、逃げようと傍の馬を見ると、馬は足が折れていてもがいていた。
絶体絶命――と思った矢先、白虎はどすんと大きな音を立てて、
瀏亮の目の前に倒れこんだ。
よく見ると苦しそうに息を吐き、鼻先は冷たく凍え、長く食べ物にありつけていないのか、その腹は薄く凹んでいた。
こんな状態の虎を狩ったところで自分が領主としてふさわしい男になるとも思えず
馬で帰ることもままならず、瀏亮は虎を助けてやることにした。
腰から剣をスラリと抜き、もがく馬のとどめを刺して白虎に与えた。

白虎が馬を食べているあいだに、なんとか部下たちと合流できないか
雪山を歩いていると、再びさっきの狼の群れと遭遇してしまう瀏亮。
今度こそもうだめだと思ったとき、
飛びかかってきた狼の一匹がズタズタに切り裂かれて雪の上に散らばった。
瀏亮をかばうように飛び込んできたのは、あの白虎だった。

瀏亮は寒さと疲労と目の前の光景に意識が耐えきれなくなり気を失った。

目覚めると、そこは暗い洞窟の中だった
先程まで極寒の雪山だったというのに、ホカホカと暖かいものが瀏亮を包んでいた。
瀏亮は、その暖かいものが白虎だということに気づいて驚愕し、逃げようとする
しかし、気づいた白虎に捕まり組み敷かれてしまう。
いよいよ食われてしまう・・・!と思ったその時、白虎は瀏亮の頬をべろりとなめた。
ぐるぐると喉を鳴らし、甘えるように頭をこすりつけてくる。
「もしやこれは・・・懐かれてしまったのか?」
と思っていると、白虎の行為はだんだんエスカレートし、舌で舐めていたのが甘噛みになり、息は荒く、股間が張り詰めているのが見えてしまった。

「待て待て待て!ストップ!」

慌てて白虎の大きな顔面を押し返し、持っていた剣を突きつけて涙目で抗議した。
自分を拒絶していると理解した白虎はしょんぼりと耳を垂らし
洞窟の外へのそのそと姿を消した。
そしてしばらくするとまた戻ってきて
反省した様子で、瀏亮の手に梅の花が咲いた小枝を渡してきた。
白虎のいじらしい姿に絆された瀏亮は、「もう大丈夫」と白虎の頭を撫でた。

それから、白虎は瀏亮に懐き、彼の行くところについてきた。
腹が減ればうさぎやイノシシを狩り、瀏亮に与え
夜は瀏亮が冷えないようにその毛皮に包んで眠った。

瀏亮が部下たちとはぐれて3日が経とうとしていた夕刻
やっと見覚えのあるところまでたどり着いた。
往路で見た梅の老木。
「あれは・・・!」と嬉しそうに駆け寄る瀏亮。
それに続く白虎は2人そこで一休みすることにした。
紳士で一途な白虎に心を開いた瀏亮は、白虎とともに雪の積もった梅の老木の下で
次期領主である重責への不安や、虎狩りのこと、

このまま白虎とともに生きていけたらいいのにという淡い期待を話す。
こんな話お前にしたって仕方ないのにな、と白虎を撫でながら苦笑いをする瀏亮を
白虎は透き通った碧い瞳で真摯に見つめ、べろりと大きな舌で頬を舐めた。
慰めるような白虎の態度に瀏亮は「ありがとう」と微笑み
「お前のようになれたらいいのにな」と呟いた。

その夜
瀏亮たちのいる山を含め、領土一帯が猛吹雪にみまわれた。
2人は小さな洞窟の中に身を潜めていたが、凍てつく寒さに白虎が瀏亮を包んで
いても、瀏亮の体温はどんどん冷えていった。
白虎は瀏亮の持っていた体を温める作用のある木の根を取り出すと
食べるように促した。
しかし、瀏亮はすでに食欲もなくなっているようで、受け取らない。
白虎は自分でそれを噛み砕き、口移しで瀏亮に与えた。

翌日、瀏亮は目を覚ますと傍に白虎はいなかった。
寒さもすっかり癒え、太陽の光が洞窟に差し込んでいるのがわかり
外がすっかり晴れているようだ。
太陽の光に誘われて、瀏亮が外へ出た時
遠くから人々の怒声と馬の金切り声、猛獣の唸り声がした。
騒ぎに駆けつけて見ると、
自分の部下たちが傷を負った白虎を囲み追い詰めているところだった。
(白虎は瀏亮に与えるための朝食を用意しようと外に出ていた)
自分に気づいた部下たちは「ご無事でしたか!」と安堵の表情を見せた。
そして父である領主が今病床に伏せっていると知らされる。
「今こそ戦果を持って領主様の元へ!」
「虎の骨を薬にすれば領主様もお元気になられましょう」
「それはできない、この虎は私を助けてくれた命の恩人だ!」
「しかし…!」

虎狩りを拒む瀏亮。
しかし白虎は瀏亮めがけて突進し、その爪を振り下ろした
とっさに避けた瀏亮の髪留めが取れて長い髪が散る
「そんな…どうしたんだ!?やめてくれ!」
その姿を見た部下たちが白虎に弓矢を向ける
「やはり所詮は獣ということか!」
部下が放った矢が次々と刺さり、血だらけになってもなお瀏亮に詰め寄る白虎。
息を荒げ、野生の本能をむき出しに目をギラつかせる姿に
意を決した瀏亮は腰に付けていた剣を抜き取った。

その時、白虎が瀏亮の足元にひざまづき、目を閉じた。
それはまるで主人に傅く従者のようであった。
白虎の首元へ添えられたまっすぐな剣。
その場にいた誰もが、その非現実的で荘厳な光景に釘付けになっていた。

「私に、先へ行けということか」
「虎が伴侶と決めた者を一生涯愛するというのは本当だったのだな」
「ならば、その想いに応えよう。」

瀏亮は静かに涙を流しながら、ありがとうと呟くと
その剣を振り下ろした。

翌年の春、その土地に新たな領主が誕生した。
文武に優れ、その姿は美しく、誰もが尊敬する新たな主人は人々から愛された。
領民を愛し、時に恵まれない子供達を養子として受け入れ
我が子のように育て上げたが
本人が誰かを娶ることはなかったという。

【終】

人虎の春

2020.05.16
十河コウ
sogawa.ko1201@gmail.com
印刷：大陽出版株式会社
無断転載・二次使用はご遠慮ください。
Do not use my works without my permission.

人虎の春

2020.05.16

'ELE